企業事例2 ［電子機器・分析機器の設計、組立て］

# 人を大切に育成し、技術力を磨く

◎深澤電工株式会社（静岡県駿東郡長泉町）

◎深澤電工の成長戦略

- 積極的に高齢者・障がい者を雇用
- 技能を徹底的に極める
- 培ったノウハウで新規事業を設立

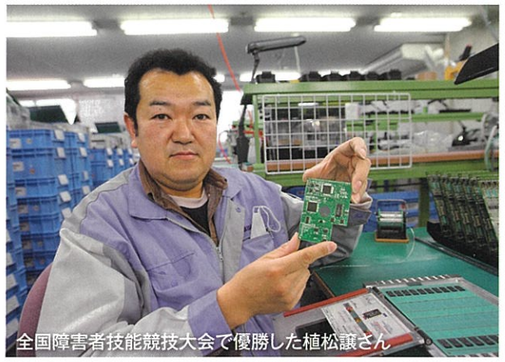
Profile
深澤好正（ふかさわ・よしまさ）
深澤電工株式会社 代表取締役
1955年静岡県生まれ。80年、結婚を機に深澤電工に入社。95年に社長に就任。取引先を拡大するとともに高齢者・障がい者雇用を積極的に行っている。
本社：静岡県駿東郡長泉町桜堤3-6-14
TEL：055-988-5131
ホームページ 深澤電工 検索

## 大手1社依存体質から脱却し 新規営業で取引先100社を目指す

静岡県のＪＲ三島駅からほど近い深澤電工株式会社。1964年創業の同社は、電子機器や分析機器などの設計、組立て、修理などをメインに行っている年商3億6000万円の企業だ。

社長の深澤好正氏はもともと沼津市内の自動車修理工場で働いていたが、昭和55年に創業者の三女の優子さんとの結婚を機に同社に入社。平成7年に社長を引き継いだ。

同社は創業当時からほとんど大手電子機器メーカー1社からの受注で、特に営業拡大をしなくても成長してきた。



全国障害者技能競技大会で優勝した植松譲さん

しかし、1社に過度に依存することはリスクも大きくなる。そう考えた深澤社長は、事業を承継してから新規顧客を開拓していく。取引先のあらゆる要求に応えるため、社員が必死になって腕を磨き、結果として技術力が向上していった。

「現在は43社から仕事をいただいていますが、私が60歳になるまでに100社まで増やしたいと考えています。社員とその家族を守っていくことが経営者としての役割だと思っているので、生き残って会社が継続していくためにももっと新規顧客を開拓したいと思います」

## 高齢者や障がい者を積極採用 適材適所に配置

同社の最大の特徴はその雇用形態だ。従業員60名が在籍しているが、そのうち60歳以上の高齢者は13名、うち2名は70歳以上。「定年制を設けず退職時期は従業員自身の判断に委ねる」という方針だ。

また、9名の障がい者（知的障がい者3名、身体障がい者6名）も受け入れている。

創業者の義理の弟が小児麻痺でありながら高い水準で業務を行っていたのを見て、深澤社長は「ハンディキャップがあっても能力が高い人材はいる」と考え、積極的に高齢者や障がい者を採用していった。

**「その人その人に合った仕事を探すのが経営者の仕事」**と語る深澤社長は、足の不自由な人には手を、手の不自由な人には目を使う仕事に配置するなど、適材適所を心がけている。

## 全国障害者技能競技大会で 大手企業を破り金賞受賞

06年からは障がいのある従業員を「全国障害者技能競技大会（アビリンピック）」に挑戦させている。この競技大会は、障がい者が就職して自立するという考え方を広めるとともに、その力を雇い主や社会全体に理解してもらうことを目的に、昭和47年からほぼ毎年開催されている。毎年約1500人が選手として参加し、およそ15万2000人が来場する大きな大会だ。

トヨタ、デンソーなどの大手企業も続々と参加する中、同社は「町工場が大企業に勝つ」をスローガンに猛特訓した。その結果、第30回全国大会では、電子回路接続部門で同社の植松譲（ゆずる）さんが見事優勝した。植松さんは入社25年目。聴覚障害のため、声を出すことができないので社内メールと筆談でコミュニケーションをとっている。しかし、電子回路接続の正確さとスピードは誰にも負けない。その腕は日本一であることがこのアビリンピックで証明された。

当初の目的だったアビリンピックでの優勝を果たしたので、次は電子機器組立の国家技能検定の全社員取得を目指している。技術指導については、「厚生労働大臣表彰優良賞」を受賞した入社31年目のベテラン・北野光雄さんが行っている。すでに1級が1人、2級は10人、3級は11人が認定を受けている。

## 徹底した掃除力を活かし トイレ清掃事業をスタート

築25年の同社の内部を見て驚くのは、床や手すり、窓ガラスが鏡のように磨かれていることだ。隅々まで掃除が行き届き、そこには雑然とした町工場のイメージはない。

製造業の間で「5S（整理・整頓・清掃・清潔・躾（しつけ））」が一般的になる前から、同社はこれを徹底的に取り組んでいた。始業前の7時半前にはほとんどの従業員が出社し、掃除を始める。深澤社長は社員よりさらに早い7時に出社。地域のごみ拾いを行う。その後ろ姿を見て、従業員も自発的に掃除を1日3回行っている。工場内の器具類もきちんと整理されている。

きちんと整理された工具類

深澤社長は「**掃除は未来への投資**」と語る。掃除を徹底することで無駄な動きが減り、作業の効率化やコストダウンにもつながるからだ。

一番こだわっているのはトイレ清掃だ。社長自身をはじめ、社員全員が素手で便器を磨く。そしてこの長年培ったノウハウを活かし、トイレ清掃事業「天使のお掃除」を始める予定だ。

「こうしたビジネスモデルを全国に広めて雇用につなげていきたいと考えています」と語る深澤社長は、全国の企業や支援学校などへ出向き、講演活動を積極的に行っている。高齢者・障がい者雇用が全国で活発になることを願っているからだ。「小さくてもキラリと光る企業を目指していきたい」と深澤社長は語る。

取材・文／本誌編集部